

會



報

昭和18年3.4月

122

日本山岳會

國土愛護聯盟に要望

塚本 繁 松

今回風致關係民間十二團體によつて表題のやうな「國土愛護聯盟」が結成され、我が日本山岳會もその構成團體として加盟する事となつたのであるが、この團體の目的とする所は

本聯盟へ構成各團體ノ聯絡ヲ圖リ、協力シテ國土愛護ノ精神ヲ昂揚シ、之ガ普及向上ニ努メ、之ニ關スル施策ヲ指導シ以テ戰時下ニ於ケル國民ノ文化厚生ニ貢獻スルヲ目的トス

とあり、其事業も單に、目的を達する爲め適當なる事業を行ふとあつて、未だ具體的の事は何も決つてゐないやうであるけれども、長期戦の結果我等の祖國々土が日と共に荒廢の危機迫りつゝあるを目撃する今日、聯盟の活潑なる活動を要望するや切なるものがある。

今頃になつて何故に右のやうな聯盟が結成せられねばならなかつたか。それに就いて先づ考へられる事は、之以上我が國土を荒廢せしめたくない、何としてもこの美しい國土を出来るだけ美しい儘に守り遂げたいといふのであらう。

そしてその爲には、構成團體の一つ一つが各個で運動を行ふよりは強力な一つの聯盟を作つてそれによつて運動をより有力なるものに推進しようといふのであらう。これは確にその通りに相違ない。

然らば現在國土が荒廢しつゝあるのは何故かといへば、それは全く戦争の爲に外ならないのである。支那事變以來六年間、忠勇なる將士の奮闘により戦闘は國外萬里の遠隔の地で行はれて來て居り直接國土が敵の砲火に損ぜられた事はないけれども、それにしても六年といふ長い戦争の間に國外からの木材の輸入は漸次減少し、遂には全く杜絶した。その上戦時下には木材の需要が増加するばかりなので、必要に迫られ焦眉の急には變へ難く國內の山野の樹木は次第に無理な伐採を餘儀なくされ、爲に國土荒廢の危機が次第に深刻の度を加へて來てゐる現狀だと思はれる。

さうした狀態の所へ昨年末來木造船の急造の爲に道並木や屋敷林迄、甚だしきは鎮守や寺院の森の大樹迄供出獎勵の目標となり、事

應は一層急迫して來たのである。先づ問題になつたのは日光の杉並木で、これは樹齡既に三百年、延々十里の並木の壯觀は正に世界最古にして最大の並木と稱せられ、我が國民文化の誇りとして國寶に準ずる程のものである。その上文部省の史蹟紀念物として指定保護され、今後何百年かの後自然に枯死する迄は絶対に伐採される事はないものと何人も安心してゐたものである。それが眞先に伐採の目標となつたのだからその反響する所甚だ大きかつた。次いで東海道の松並木や其他名所となつてゐるやうな有名な並木が續々と供出の目標となり、最後には全國の氏神や寺院の森の神木佛木迄が伐拂はれるとの報道に、事態の深刻さを知つた國民の胸は強く痛んだのである。

アメリカのやうな強敵を相手に戦争する時はかうした問題が必然的に起つて來るものと、戦前誰が豫想し計畫してゐたらうか、恐らく今度の事は戦争過程中に起つた餘儀ない事情によるものであらう。それにしてもこれ等名木伐採の問題は決して政府の命令によつて行はれてゐるのでなくて、大政翼賛會とか翼賛壯年團あたりが推進力となつて運動が行はれたのである。そして實現には最も困難で

あらうと豫想された史蹟紀念物の日光杉並木が難なく文部省から許可されるに及んで、全國の木材供出が推進されたと見てよいと思ふ。曰く、日光の杉並木さへ應召するのだ、鎮守の森さへ出陣するのだ。一家の屋敷林を供出するのだ當然ではないか。さうなると、個人所有のものなど最早一言もない譯である。かくて木材供出は全國的に好成绩を収めてゐるやうであつて、一應この企ては成功したものと云つてよいであらう。

しかし乍ら治水、風致、精神文化等に深い關聯のある、本土内の樹木の大量伐採といふ重大問題を、政府が責任を以て計畫的に實

目次

- 一、國土愛護聯盟に要望……………一
- 一、國土愛護聯盟結成趣意書……………三
- 一、山の古木の値段並に當會備付圖書のこと……………四
- 一、登山年譜史料管見③……………六
- 一、スウェン・ヘデン氏畢生の業績……………七
- 一、キナバル山……………七
- 一、會員通信——沼倉寛二郎、袋一平、石田誠一、川喜田壯太郎、黒崎迪男、美木猪之吉諸氏……………八一〇
- 一、第三回有志懇談會……………一〇
- 一、會員計報……………一〇
- 一、會務報告……………一〇

行するのではなくて、専ら民間團體を表面に立てゝひたすら國民の愛國心に訴へるやうな態度を取つて行く事は果してよい事かどうか、疑問があるのではないかと思はれる。一面、政府の命令による強制でないといふ事は、如何に木造船の新造が焦眉の急に迫つてゐるとはいへ、木材の需給には尙相當に餘裕のある事を物語つてゐるものであらう。何となれば眞に火急に迫られたものならば最早國民の愛國心に訴へてばかりゐる餘裕などない筈だからである。さうとすれば甚だ結構であるが、この愛國心への訴へて行く事は勢ひ無計畫的になり易いのでないかと憂へられる。樹木の伐採は金屬の供出などゝ大いに相違し、多々益々辨ずるといふ譯にはいかないからである。そこには必ず残さねばならぬもの、残したいもの、やむなく伐るものといった段階を明確にして計畫的に事を運ばなかつたならば、有形無形に由々しい事態の發生の危険があるからである。

金屬は多くの場合單なる物質と考へる事が出来よう。それだから今如何に無理をして供出して、戦争が済んだら如何ようにも補充する事も出来よう。しかし樹木、特に老木は一旦伐つてしまつたら最早五十年や六十年では決して元の姿に歸らないのである。日光の杉並木などこのまゝ生かして置けば何百年かの間々々として天空に聳えて、力強く國民精神の作興に資する事が出来るのであるが、一旦切倒してしまへば最早永久に再現される事はないのであるから、その報道の國民に與へた打撃は中々大きかつたものと思ふ。それでも時局は深刻だと思つたから何者も正面から反對は出来なかつたのである。此際特に考へねばならぬのは鎮守や寺院の森の事である。これ等はも早單なる生物と言へない程の精神的の存在で、これは日本精神の重要な發生要素だと言へると思ふ。神社の尊嚴はその神々しき森林にありと言へば言ひ過ぎであらうが、尊嚴を最大限に助成してゐるのは實にその森林、就中杉の老樹である事が多いのである。故國を遠く離れて思ひを遠く故郷の姿に馳せる時、或ひは戦場の濠の中から暫しふるさとを偲ぶ時、その最も神聖にして最も懐かしいものは何であらうか。それは氏神様の神々しい姿ではないか。神々しい森、神さびた宮居、かすかな神燈の光、さうしたものが我等の郷土愛を愛國心を振ひ立たせるのではなかつたか。氏神様に護られて或は氏神様と共に敵と戦ふといふ觀念は現實に我が兵の心の

中にあるのである。さうした神聖な神木を、神の森を、よく／＼の事でなくては裸にする事は出来なない筈である。私の少年の頃の事であつたが、明治の終り頃全國的に氏神の合併が内務省から強請された事があつた。何でこんな事になつたものか知らないが、恐らくこれによつて耕地を増さうとしたものであらう。しかしそれは愛郷心をうすくし國土荒廢の因を作るものであるとして當時強烈な反對運動が起り、先年亡くなつた生物學の權威南方楠熊氏なども此運動に奔走して獄に投ぜられた事を私は最近になつて知つた。しかしこの運動の効もなく多數の氏神は合祀された。この時の合併で私の幼年時代の最も神聖な存在であつた氏神も他へ合祀されて今は跡形もないのであるが、今も在りし日の神々しい森を思ひ浮べて無念にたへないものである。こうした氏神に對する尊崇と強い愛着は我が國民性の特長であり愛國心發露の泉であると思ふ。その主要原因は實にその森にあるのである。かうしたものを戦争に捧げる場合もそれは最後の最後でなくてはならぬと思ふ。

「國破れて山河あり」とは支那に於ける内亂の跡を弔つた感傷の詩である。今はそんな感傷どころのなまやさしい時代ではない。國家あつて山河あり、國家なくして何の山河があらう。戦争には絶対に勝たねばならぬのである。國を焦土と化しても負けてはならないのである。だから山や野を丸坊主にするくらいは何でもないか或ひは言へるかも知れないが、それは矢張最後の場合である。現在は無論そんな不吉な最後の場合など迫つてゐると思はれないのである。支那事變以來國內では随分無理に木を伐つて來てゐると思ふ。二十年三十年といふ若木さへ到る所で伐られて居るのである。それだから總ゆる方面で既に伐採の限度が近づいて來てゐるのではないかと思ふ。伐つた後をすぐ植林するのは當然としても、若い植林ばかりで治水が出来るものもあるまい。一旦運悪く長雨に見舞はれたらすると大洪水を招くような原因を、今少し今少しとは／＼し乍ら作つて行くやうな事は最早放置出来ないのでないか。食糧増産にも治水は絶対に必要である。戦争が長く續くと色々事がこみ入つて來て、これを巧みに綜合的に指導して行くといふ事の如何に困難なものであるかといふ事がつく／＼思はれる。しかし之以上國土を荒廢せしめないようにし安泰を保つ爲には、必要な木材の大部分

を他に求めねばならないのではないかと思ふ。しかも共榮國內には理想的な造船材を始め木材が無盡蔵にあるのだと聞いている。これがなないのなら背に腹は變へられぬといふ事になるのだが、これがあつて以上どうしても之が目についてならない。しかし船が足りないからそれを運ぶどころでない、もつと他に運びたいものが山程ある。とにかく早く木造船でも作つて持つて行かなくてはならない。しかしこんな所を何時迄も堂々巡りしてゐるのでは國土荒廢の危険が刻々迫つて來るのである。此處に於て萬難を排しての大國策が絕對必要と思ふ。無論政府ではぬかりなく其方面でも計畫があるのであらう。しかし現状を見てゐては大きな不安を感じるのをどうする事も出来ないものである。さうした大計畫と實行を一日も早く國民の前に明らかにせられる事を要望するや切なるものがある。

今や屋敷林などは相當に供出せられたやうである。今日となつては如何に大切なものであつてもそれはやむを得ないであらう。しかしそれにしてもたゞ愛國心にばかり訴へるやうな無計畫であつてはならないのだと思ふ。そして最後のぎり／＼迄鎮守の森とか、史蹟や天然記念物として指定あるもの

などは手をつけて貰ひたくないものである。之は確に國民の士氣に影響すると思ふ。國土愛護聯盟はさうした運動に活躍するのにはうつつつけの團體であらうし、今では既に時機後れたりとの感もあるが、一層献身的の努力を期待してやまないものである。又今度の供木運動の動きを見てみると、一般國民にはまだ風致とか自然愛護といふ事に對する理解力の不足を感じられる點も多かつたやうに思ふ。啓蒙運動も矢張中々大切な問題である。

一時新聞などでは都會地や公園の樹木迄供出されるやうな話であつたが、幸にも最近では沙汰止みのやうである。都會地などは一層の綠地化こそ焦眉の急であれ伐採など持つての外と言はねばならぬ。最近聞く所によればあれ程騒がれた日光の杉並木も、老齡過ぎてもろかつたり空洞があつたりする爲にどうやら大部分は安泰に済むらしいとの事である。無計畫に役にも立たぬ老木を切り倒してそれが結局材木ブローカーの悪稼ぎに終るやうでは諦め兼ねると思つてゐるが、どうやら日本人中々頼もしいと近頃愉快に思つてゐる。國民の一念こつて此處に到ると言ふべきか。

終りに國民の赤誠によつて供出

された木材の使用先が、斷じて暖味模糊としたものであつてはならぬといふ事を切望したい。

な活動の行手には多々の困難を藏してゐるものとは思はれるけれども、國家永遠の計の爲に急遽適切な活躍を要望してやまないものである。(十八年四月)

國土愛護聯盟結成趣意書

今や祖國日本は大東亞戰爭完遂を目的とし、現地に於ても銃後に於ても一億一心、決戦體制下にある者である。而して一方に於ては大東亞共榮圈の首班として其の建設に邁進しつゝある。此重大時局に當り、多年祖國の自然及文化に關する調査研究に盡し其保護、利用、開發等を計り來れる下記諸團體は「國土愛護聯盟」を結成し、相聯絡し一致協力して國土の認識を深め、之が愛護の精神を昂揚すると共に一層其普及向上を計り、以て大東亞戰爭の完遂と大東亞 榮圈の建設に資せん事を期するものである。

昭和十八年三月

公園綠地協會、國立公園協會、國際觀光協會、史蹟名稱天然記念物保存協會、社團法人大日本山林會、都市美協會、社團法人日本溫泉協會、日本觀光聯盟、日本郷土會、社團法人日本山岳會、社團法人日本庭園協會、風景協會

尙右聯盟は各構成團體から理事及び幹事を各一名推薦する事になつてゐるので、本會では左の通り推薦した。

理事に 木暮理太郎氏
幹事に 鳥山悌成氏

川崎隆章編著

A5版約四五〇頁
定價約四圓五十錢
裝幀上田徹雄

近刊 日・本名山紀行

本書は祖國の名山三十座に就き各編成者がこれを分擔し、山の歴史、位置、紀行、時間記録、參照地圖、最新の注意事項等を明細に含筆した力作で當に我々昇龍的壯觀である。各篇概念圖、挿圖多數挿入。

タツツ (油彩畫目録) 中村清太郎 名山の意義 (序文) 川崎隆章 組寫眞 岡田紅陽、今泉正路、矢野忠三郎、阿部康三、石川治郎、傳執筆家

大雪 山犬 銅哲夫 日高山 脈佐々保雄
八甲田 山三 瀧敬三 鳥海山 島中善茂
岩手山 達増寛一郎 飯妻山 山崎精玄
藏王山 安齊微 八海山 山崎全敬
苗場山 木暮理太郎 谷川岳 小野崎良三
立馬山 冠松次郎 八會御嶽 岳木繁松
富士山 川崎隆章 八會御嶽 岳木繁松
加賀白山 三田尾松太郎 聖が嶽 山崎平賀文男
近畿金剛山 藤木九三 伯耆大 山崎開健之助
霧島山 仲西政一郎 四國嶽 山崎泰良雄
朝鮮金剛山 本多敬夫 阿蘇山 北田正三
岩科小一郎著 定價一・八〇 送料一・一五
山麓滞在 中村 謙著 定價一・八〇 送料一・一五
附東京 山と温泉の旅

體育評論社

記事を読んだが、「北京のやうな値段」にはなつてゐないやうな気がする。

右記の四月號や九月號ばかりではなくその頃の學燈にはよく斯様な本が出てゐたが、それらの本のうち當會に備付けられてゐるものもないものもあるが、ない方が多い。その様な目録を見るにつけても何とかして當時購入しておけばよかつたのと思ふ本がある。虎ノ門の事務所は一つには圖書室であつて、購入圖書並に會員の熱心と厚意による寄贈書が備付けられてゐる。我國の山岳會又は他の機關に於てもこれだけの山岳に係の寄物をそろへてゐる所はないといふことであるが、まだまだ備付けなければならぬものが多い。當會の財政は會報に發表される決算報告によつても明かなやうに圖書の購入費なども充分にあるわけではないから高價な本や多数の本を購入することは出来ないと思ふ。(それを補ふ意味で會員の厚意による圖書基金受入の制度も設けられたのであらう)

話題のスタインの著書はさておき意外なのは例へばエウレスト一九二一年、一九二二年及一九二四年等が當會には備付けてない。これらは刊行當時は別に高價なものではなかつたが、自分で持つて

ゐるとついで會の備付を失念することがあるので當時そんなことだつたのではないかと想像する。今となつてはちよつと求めにくい。(前記一九三九年の目録によつて求めれば三冊送料を入れて百三十圓位でよかつた理である。)デオグラフィカル・ジャーナルなんか創刊からあればと思ふ。

當會の圖書備付が益々充實することを希ふと共に、その整備も一そう充分に行はれむことを希ふ。書物を愛好するものはそれらに對し特別の感情を持つてゐる。所有者の心も書物に通つてゐるかと思はれる程であつてそれらの感情、は左の言葉にもよく表されてゐる。

「……本といふものは素より有情のものである決して木石ではない。慕へば、いつかは、おのづと訪ねてくる……」西川義方氏讀書人(昭和十八年四月號)

「……この時私はつくづく思つたのである。本は生物にちがひない。ほんたうに讀んだ本なら、いつ誰にかしても、三日飼へば主人の恩を忘れぬ犬のやうに、必ず主人の元にかへつてくるものだといふことを信ずるやうになつたのである……」永野爲武氏學燈(昭和十八年四月號)

前者はさがして求めてゐるが

手に入つた時の、後者は無くなつた本が程経て再び元の所有者に戻つて來た時の喜びを述べたものではあるが、實際には心無い借手のためになくなされた本や盜難にあつた本などが遂に戻つて來なかつた例の方が多くことであらう。

本を大切にすると人々にも本を自分一人のものと思せず、多くの人の役に立てたいと希ふ人が多いが、紛失、破損等の不安があつては自分の手許から離したくなくなるのも當然である。

圖書の監理、整備といふことは多大の努力を要するもので、たゞ本が好きだ位では出来ない。そして熱心な人々が衝にあたらば充實して來るが、反對に少しないがしるにすれば急速に荒廢して來ると思ふ。

資料は調査に必要なものであり、調査は實行に先だつて充分にしなければならぬ。單なる「愛書趣味」からではなく、このやうな資料をそろへることは先づ第一に必要なことである。

我國出版の本の中古品は周知の如く昭和十六年三月及昭和十七年四月の商工省告示によつて出版年月に従つて販賣價格が指定されてゐるのであるが特に書名を示したもののうち山の本には小島島水氏「日本アルプス」四冊三十五圓、横

有恒氏「山行」八圓等がある。然し隨分古本屋を見て歩くが、見かけたことがない。辻村氏の本や大島氏の本等もなかくない。本屋も指定價格では手放したがいらない。大抵のうちに、山の本に限らず少し目ぼしい本は店頭にならず、中にしまつてゐて、關係の深い顧客に賣らうとしてゐる。

そして御客からも、何かかわりに本を出して貰ふことを望んでゐる。現在、人々は一度入手した本をなかく手放さないせいか、實際に古本屋の持つてゐる本が貧弱であつて、古本屋歩きもひと頃のやうに楽しくはない。古書即賣會なんかでも例へば「山行」なんかは目録に出てゐても、開場時刻前に賣れてしまふ。古本屋は本を一冊でも多く賣ればよいといふのはなく、やはり自分の店によい本を持つてゐたく、永く御引立に預つた御客に満足と與へたいと希つてゐるものが多いから、どん／＼出しては殺到する客に忽ち買はれてしまつて店頭も淋しくなつてしまふ。他人が買ひたがつてゐると自分はそんなでもなかつたのに、いち早く手に入れたしまつて會心の笑をもらすやうなのはよろしくなく、大體自分のほんとに求めてゐるものに限り、他はひとに譲るとか藏書も整理して古本屋に出し

本年度會費

に就てお願いひ

會計

本年度會費につきましては、三月、會報に折込みで一度お願ひ致しました外はまだ一度も直接請求した事はありませんが、それでも今日迄既に四百人程の方々から送金を受けました。これは會計として非常に感謝してゐる所であります。この額は昨年一昨年に比較して可成劣つては居りますが、何しろ直接手紙でお願ひしたのではありませんし、色々の事情で會報さへ満足にお送り出来なかつたのですから無理もない事と思つて居ります。

しかし會費の到着が後れますと自然事業の遂行に支障を來し易くなりまうので、近く個別的に會費の請求を致したいと存じます。

就きましては此文を御覽になつて會費未納をお氣づきの方は何卒至急御送金願ひ度存じます。何百人かの方がそれを實行して下さいますと、手数と費用とがそれだけ省け在庫金も多くなるといふ譯であります。よろしく御願ひ致します。(五月初旬)



登山年譜資料管見 (三)

沼井 鐵太郎

○明治四十年(皇紀二五
六七年、西曆一九〇七
年)日本登山年譜資料
(其の二)

〔秩父の部〕

岩殿山・三峰山・武甲山
四月上旬。田邊乙葉、聚翠子。
山岳三の二(明治四一、六)五二
―八二「秩父山紀行」。

仙元峠・三峰山

五月上旬。河田黙、梅澤親光。

山岳三の二(明治四一、六)七五
―九七及三の三(明治四一、一〇)
四八―七二「秩父の一角」。

御岳・大岳・多摩川源流・竹森
山

五月。西山南洋。山岳三の一(明
治四一、一一)五六―六二「青梅
街道より竹森山を越して秩父街道
に出づる記」。

〔丹澤の部〕

大山

例年に比し阿夫利神社に登山す
る者倍數以上で、七月二十七日山
開きから八月三日迄に登山後伊勢
原宿泊者一九六七人、先導師宿泊
六七四三人、宿泊せざる登山者幾

千(?)と傳へる。――山岳二の三
(明治四〇、一一)一〇六―一〇七。

〔箱根の部〕

駒ヶ岳・二子山

三月下旬。城棲碧(數馬)、山岳
二の二(明治四〇、六)八〇―九〇
「函嶺の駒ヶ岳」。

二子山は當時既に若ノ湯から道
路・休息所等の施設が整つてゐた。
山岳同右八九頁。

〔富士山の部〕

冬季登山

一月下旬。山階宮筑波山觀測所
長佐藤順一、技師筒井百平、強力
齋藤鶴吉、勝又爲次郎、勝又治三
郎。山岳八の一(大正二、四)一九

八。――一月二十五日山麓野中氏
宅より二合目を経て足袋・草鞋の
下にカンジキ使用、午後四時十五
分山頂の一峯賽ノ河原着(零下十
度半)、銀明水より下山、下りは苮
口使用、九時四十分太郎坊歸着。

春季登山

五月。山梨縣知事武田千代三郎
(本會々員)外縣技術官警察官數
名。山岳二の三(明治四〇、一一)
一七二。……前項が科學調查登山

とすれば、此は内政事業調查登山
ともいふべく、吉田口登山道改修、
山宿建設、電話架設の計畫檢討を
目的としたものであつた。然し一
行は六合目迄しか登つてゐないや
うである。

夏季登山

七月末。前項武田知事一行電話
開通式の爲の登山。山岳二の三(明
治四〇、十一)一七二。――之に
より春夏の候工事の爲登山登頂が
あつたと見てもよい。要再調。

八月下旬。小泉信二。山岳三の
二(明治四一、六)三九―五二「不
二山に拒まるゝの記」。――大宮口
五合目に風雨の爲籠城二日にして
下山。天候不良の際富士山夏山當
時の狀況を知る事が出来る。

(何)月。遅塚麗水、江見水蔭、
長井金風、登坂竹風、太田孝之、
織田東馬、其他一行九人。山岳三
の一(明治四一、三)一五一。――

文士連中を主とした登山であるが
異色あるのは太田醫學士の醫學的
觀察で、本邦登山醫學早期の業績
と見る事が出来る。同上氏等合著
「金剛杖(春陽堂)」に就て再調のこ
と。

明治四十年富士山夏季登山者數
は、八月初より俄かに増加し一日
平均千五百餘人といふが、又八月
五日乃至二十五日の合計六五一八
人、内譯吉田口八〇〇人、御殿場

口四〇〇人、大宮口三〇〇人、須
走口二〇〇人と新聞紙は傳へる。
又八月十一日奥ノ院賽錢收入は三
千餘圓であつた。山岳二の三(明
治四〇、一一)一六四―一六五。
要再調。

秋季登山

十月下旬。小島烏水、同榮(神
奈川中學生)、剛力勝又琴次郎。山
岳三の一(明治四一、三)一八八。
小島烏水著「山水美論」(明治四一、
九)八一―一〇九「雪中富士登山
記」。――御殿場口から劍ヶ峯迄往
復した當時の所謂季節外れの登山
で、八合目から上は新雪行であつ
た。

〔八ヶ岳の部〕

夏季登山

七月中旬。前田曙山(本會々員)
赤岳登山。山岳二の三(明治四〇、
一一)一七四、同三の一(明治四
一、三)七七。

七月中旬。磯野敬(本會々員)。
山岳二の三(明治四〇、一一)一
七六。

七月下旬。城棲碧(數馬)。山岳
同右一四二―一四五及一七四。

七月下旬。牧野富太郎、矢澤米
三郎、河野齡藏。山岳同右、一七
六。

(何)月。小泉和雄(本會々員)
植物採集登山。山岳同右一七六、
同三の一(明治四一、三)七七。
要再調。

妙高山

八月。青木忠次郎(本會々員)。
山岳二の三(明治四〇、一一)一七
四。

(何)月。夏目新治(本會々員)。
山岳同右一七三。要調。

戸隠山・黒姫山

(何)月。平井寛暢、森幸衛(何
れも本會々員)。山岳二の三(明治
四〇、一一)一七三。要調。

(何)月。志村烏嶺。飯綱山共登
山す。山岳同右一七三。要調。

飯綱山

四月下旬。志村烏嶺。山岳二の
二(明治四〇、六)六二―六九「飯
綱山」。――本行は山麓撮影行に過
ぎざるも、此の他に同人は二回の
登山あり、内一回は前項参照。要
再調。

飯綱山(飯綱山か?)

十月中旬。長野縣立高女生一行。
信濃毎日新聞十月二十日、東京諸
新聞十月二十日、山岳三の一(明
治四一、三)一三四―一三六。――

十月十八日靈仙寺山の峰に登り
し者九十名中十六名と教員二名道
に迷ひ、女生俣野輝子(十七歳)近
視眼の爲谷に落ちて重傷。本山は

明治三十二年秋にも遭難死あり。
要再調。

（白馬岳の部）

白馬岳

七月。志村鳥嶺。山岳二の三（明治四〇、一一）一七三。——同人六七回目の登山。

八月。小川正直（本會々員）。山岳同右一七六、同三の一（明治四一、三）九〇——九小川樂魚「白馬岳植物採集案内」鑑ヶ岳にも登る。

八月中旬。丸山曉霞。山岳二の三（明治四〇、一一）一七二——七三。

夏季。八木貞助、細野浩三（何れも本會々員）。山岳同右一七三。夏季。沼尻好（本會々員）。山岳四の二（明治四二、六）八五——八九。

丸山嘉吉外一名の工夫同行。前項共に要調。

白馬岳・祖母谷

七月二十五——二十八日。高野鷹藏。山岳三十五の二（昭和一一、三）一八一。要再調。

八月中旬。冠松次郎。山岳同右一八一。——十八日塩頭（清水）小屋より祖母谷温泉に下る。要再調。

祖母谷・白馬岳

八月中下旬。吉澤庄作、漆間唯一、朝日某外三名、案内者仁次郎（菅澤村）、人夫五名、計十四名。山岳五の一（明治四三、三）四三——

五九吉澤庄作「越中方面大連華山登攀録」、山岳三十五の二（昭和一一、三）一八一。——十八日三日市下立村——内山村——祖母谷二泊進行——西ノ谷——清水平野——白馬岳——鑑ヶ岳（登頂せず）——別の谷みちより——清水平——祖母谷。本行及前項二行は清水平・祖母谷の間の登山家先蹤行として注意すべきものである。

（劍岳の部）

劍岳四周の測地跋渉

四月二十四日東京より參謀本陸地測量官柴崎芳太郎一行富山縣に來り立山を中心に半年間測地岳登攀に付調査す。富山日報（明治四〇年七月末）「劍山登攀冒険談」、山岳三の三（明治四一、一〇）一四——一八（牛山生）。山岳五の一（明治四三、三）四〇——四二、同六の一（明治四四、五）一七八——一八三柴崎芳太郎「本誌五年第一號所載劍嶽登山の記事に就て」同六の二（明治四四、七）一〇八——一〇九。要再調。

劍岳第一回登山
七月十三日。柴崎測量官一行中の測夫生田信（二十二歳）、人夫山口久右衛門、宮本金作、南川吉次郎、外一名。前項諸文献、大井冷光著「立山案内」。——査察登山を命ぜられた測夫生田は人夫と共に劍澤野營地を發し雪溪（長次郎澤



帳 拔 切

か）に登る事五時間にして絶頂に達し、昔時登山の遺物を發見、且つ登山目的たる建標の可能を確めて下山、再び劍澤に野營した。人夫等は絶頂近くからすぐ下山したもののやうである。要再調。
（未完 劍岳第二回登山次號掲載）

スヴェン・ヘデン氏
畢世の業績

大東亞探險地圖の作製

——獨逸文化通信——

（ベルリン特電）一年前ベルリンの探險協會記念式當日大東亞地圖特に一九二七年より一九三五年に至るスヴェン・ヘデン氏の最近の探險の結果に基く大東亞地圖作製を發表したが、今回この記念すべき地圖の第三枚目が發行されるに至つた。今まで發行された部分と共にこの地圖はスヴェン・ヘデン氏の生涯の事業の最高峰を示すものである。この地圖作製は世界的に有名なゴータのユスツス・ペ

ルテス製圖會社で行はれ、この財政的援助はスヴェン・ヘデン氏のアジア探險の功績を認めてゐる獨逸政府によつて爲されることになつてゐる。またその他のスヴェン・ヘデン氏の亞細亞探險を評價する事業も進捗してゐる。即ち探險の科學的業績を發表する約五十卷の全集は今までに二十二卷發行されてゐる。獨逸人探險家をも含むヘデン探險隊員はこの全集に於て探險中に得た詳細な研究、調査、測量を發表してゐる。これは地理學、測量學、地質學、古生物學、考古學、氣象學、動物學、植物學及び民族學の各部門に亘つてゐる。（島田巽）

キナバル山

大東亞戰爭勃發後私共は特に南方の山に心を惹かれる事は當然の事であらうが、その間に昨年中既に二つの高山登攀が我が國の人々によつて行はれた事は愉快な事に相違ない。一つは昨夏新聞記者團によつて行はれたジャワの最高峰スラバヤ南方に聳ゆるスメル火山（三六七六米）の登攀であり、今一つは昨秋山口隆一陸軍報導班員外十數名の軍人によつて、命令によつて行はれたボルネオの最高峰キナバル登山である。最近の雜誌記

事からこのキナバル山について少し切抜いて見よう。

キナバル山は北ボルネオの北端に近い丘上に聳立する花崗山の岩峰で、海上からもよい目標となる山だといふ。標高は四千二百米といはれるから舊日本ではなかつた高山である譯である。然し熱帯の山の事だから氷河などある譯ではなく、残雪の積る事もないと言はれるが頂上附近は零度内外に氣温が下り岩壁には氷を見るといふから雪の降る事だつてあると思はれるが積るなんて事はないのであらう。しかしセレスマスやスマトラ邊りの三千米級の山々が頂上迄樹林に覆はれて殆んど高山らしい相貌を見せないといふのと違ひ、流石に四千米を越へた山ではあり、又岩峰である爲、寫眞で見ても中々堂々とした山容であり、原住民はこの山を、人が死んだら皆其處へ歸るのだと言つて崇拜し信仰してゐるといふ。

この山は西海岸の鐵道の北端ゼツセルトンから五十哩弱北上してコタブルドに至り（途中テンギラシ迄自動車、其後乗馬）其處からテムバスク河に沿つて南へ溯行、キナバル山の南麓テナンボクに達し、其處から登山に取りかゝるのが順路らしい。其處迄三四日、其處から頂上迄三日位の行程のやう

である。

頂上は最高峰ロースピーク（一三四五五フィート）の外百フィートと高きの違はない岩峰が五つもあるそう、アレキサンドラ、セント・ジョーンズ、エドワード、ジョージ等の峰が亂立してゐるさうである。ロースピークの高さを一三四五五フィートと測定したのは皇紀二五〇七年に登山した英艦スリアン艦長レイモンスであるが、初登頂は二五一年にヒュー・ローが行つたものと言はれる。其後何十回かの登山があつたそうだが殆んど英米人で、本邦人にはなかつたようである。

山口氏の一行は根據地ブンドワン（チナンボク南方）を十月二日に發し五日十時十分ロースピークの頂上を極めてゐる。九月二十七日にゼットルトンを發してから十一日目である。

この登攀記事を読んで特に私の興味を感じたのは、皇軍がキナバルに登ると聞いた原住民達は、誰の命令を受けたのか判らないが、一行の登る前に十分下調査を行ひ道を直し棧道を修理し、小屋を建てたりして一行を迎へた事である。内地にあつては尊きお方の登山の折に行はれるやうな事を原住民は皇軍に對して行つてゐる。ほゝえましい事だ。かうした山では

あるが、この山には未踏のピークもあるさうだし、今後は色んなコースから本邦人の登山を見る事は確實であり、全貌の明らかになるのもさう遠い事ではあるまい。東麓にはバリンといふ温泉場もあるさうだし、附近は一帯に高原だし何となく日本人向の所らしい。ただ山蛭が多いといふ事だけはやゝ苦手である。（世界知識十八年四月より。塚本記）



會員通信

初冬に立山へ

沼倉寛二郎

去る十一月二十二日—二十三日の連休を狙つての立山行は相憎と出發の土曜日降雨激しいため何となく意氣舉がらず、途中案じつゝ熊王清水（一六・五〇）からビジョ谷に（一七・五〇）着く頃は全く日

も暮れて仕舞ひました。ビジョ谷よりは三、四月頃數回入つて居りますが十一月はこれが始めてです。案の狀心配して來た積雪一尺弱とブツシュのため入路全く困難でしたので、やむなく此處より最近切り開いたと言ふ營林道を暗雪路手探り新築間もない營林小舎（一八・四〇）に辿り着くまでは不安な行程でした。何分この新道は始めての事であり又途中八時間も迷つたあぐく退避する學生の一行と出會つたばかりなので思ひなしか心細く感じられました、が小憩後は充分自信をもつて半分ばかりして二俣（一九・二〇）右弘法小舎左ブナ坂（三〇〇米）の中ば埋つた指導標を發見、安堵したものゝこゝから小舎までは随分と長く感じられました。勿論これもガスと雨に遮られたせいで多分にありました。兎に角迷はずに、どうやらブナ小舎（一九・四〇）に辿りホツト致しました。一行四人荒らされた小舎での自炊です。（今年も小舎は全部公徳販賣で米味噌醬油木炭使用一泊二、〇〇）近來に珍らしい豪華なすき焼など満腹して人心地つき床に就く頃は二四時を一寸過ぎてゐました。夜半は烈風に脅やかされまんじりとしれない中に夜が明けて翌二十二日は豫期に反し素晴しい好天です。銀崎山などは新雪

に輝き、いやが上に一同張り切つて食事の後仕末もそこへ十時出發です。途中桑谷刈安谷（積雪二尺—二尺五寸）はこれも豫想到達し險阻でブツシュと新雪が定着せぬせいか小さい雪崩の障害などと思ひがけない時間を消費して仕舞ひました。桑谷の一本杉で焚火を圍み晝食やお茶など啖つて愉しい憩をした三、四月の頃を思ひ出すと餘計意外にうたれました。十三時弘法小舎（冬季食糧なし）で晝食を攝り追分小舎（食糧木炭ありこの秋増築十四時三〇）夏道を大廻り（もつと積雪があつたら樂に姥懷を近廻りされますが）して、十七時天狗（四尺—五尺）着て、今し方落ち込む夕日が遠く白山や鐵崎の山々未だ雪をよせつけられないものかドス黒い岩肌を惜気もなく露出してゐる剣は山男には堪らない魅力です、鶴ヶ御前雪の雄山の夕映へも何時もながら何とも言へぬ壯麗に心をうたれるものがあります。この感激と法悦に何時しか疲れた身を忘れ骨髄までしみる酷寒に我に還る仕末でした。夜中は滴る満月が岩の隅みまで照して吾々を無性に悦して呉れました、これが聖戰下かと疑はれる程の静寂と言ひませうか、實に勿體ない一時で今更乍ら御稜威の有難さに只感涙にむせびました。二十

三日も素適な快晴です。十二月に近いと言ふのに、これは又何と言ふ暖い小春日和の和かな朝でせう。この様な晴天の筈でなかつたので御丁寧にアイゼンとビツケルは持参せずに、山の頂きは残念にも斷念して引返して來ました。今更申立てるまでもありませんが一ノ越—二ノ越より五色、ミダケ原の大雪原を眼下に、又白皚々たる北部山岳の全望は何と言つても他に比類のない雄大さがあり、一幅の畫にも譬へる事の出来ない壯觀でよき展望臺と思ひます。一の越より粉雪をけつて七轉八轉の滑行は正か十一月のこの日こんなにも満喫するとは夢にも思ひません、本當に恵れた愉しい三日間でした。歸路はブナ坂を稱名八丁坂ルートに變更鋭い雪庇に久方振りに緊張、スリッパすれば直下二千尺餘の斷崖下を思ひ浮ぶれば今更冷水の浴びるものがあります。途中雪崩岩崩などの危険で十一月以降の利用は恐らく至難の様にはれます。當日某醫大を始め數組の學生の入山がありましたが敢闘精神に缺けるのか、未練がないのか惜氣もなくサツソーと天狗から引返す、この頃學生のフアイトなさは只一驚の次第でした。尙最近公徳販賣のすきを狙つて悪質ハイカーの跋扈により米俵毛

布に至る大げさな持歸りの不徳漢によつて恐慌を來たし、決戦下海に遺憾の極みです。(一七・一二・一記)

九州と四國から

袋 一 平

二月二十七日に九州南端の開聞岳にのぼりましたが、まるで夏山で、ほとんど裸で道中しましたところ、今度は三月三日、九州本土の最高峰久住山にのぼり、猛烈な寒さと、全山の素晴らしい霧氷群と氷の世界とに度膽を抜かれました。山ふところの法華院温泉に一泊して登頂したのですが、この温泉の感じは嚴寒の鹿澤によく似てゐました。久住では、何よりも北千里ヶ嶺といへる盆地の景觀にとても感心しました。まるで十六ミリのバミール盆地(少し大げさですかね)でした。

九州二ヶ月の旅も今夜が最後でこれから四國に渡ります。(三月四日)

X X

今度は四國のお山に登りたく、石槌を目指しましたが、土地の人がどうしても駄目といふので、剣山に向ひました。初日木屋平村谷口に泊り、二十三日快晴に恵まれ追分から上は腰を沒する積雪でし

たが頑張つて頂上に至りとても愉快でした。頂上は平らな、廣い草原で「劍」の名前が少し變な感じでした。

二日目は見ノ越の神社に泊めて貰ひ、本日一字林からバスで真光驛に出て、當地にやつてきたところです。前後が曇小雨、二十三日だけ快晴といふ、今年は九州の山から引續いて悪運われにありといふところで、氣をよくしてゐます。(高知にて)三月二十四日。

乗鞍岳便り

石田 誠 一

いつも御無沙汰致して居ります。今月は六日の夜行で乗鞍へ参りました。トラツクの御蔭で、氷の道も大野川迄楽々通り、冷泉小屋へ二泊の上、歸りもトラツクで島々へ出ました。

お山は晴天で、スキーは難行でしたが下る當日は終日吹雪の故で、愉快な記憶を残すことが出来ました。上高地は大變にぎやかだとの話です。若い人々と一升瓶と大きなストウツに囲まれた常さんのことを考へると微笑ましい感情が盛り上つて、次の山行の準備と云ふことになり、オヤヂのスネも細くなることせう。来月は上高地へ参ります。(三月十二日)

九州の山から

川喜田 壯太郎

九州の山登りがして見たくなつて、藤島さんにハガキを出したら暑くならない内に來いとのこと。プランは熊本についてから相談しませうと書添へてあつた。

三月十三日の土曜、仕事を済まして十三時五分と云ふ東京發の急行に乗る。翌朝、博多で乗換へて唐津に行く。鏡山に登つたり、名護屋城趾を見たり、それから長崎へ出て、教會堂と支那寺を見、天草を通つて熊本に出ました。

藤島さん、元氣。相變らず良い話をして下さる。いゝ家庭の客になる。うれしいことだ。筑紫山岳會の新堀さんも來て、行届いてコース教へて下さる。

十八日朝九時、熊本を立つて霧島に向ふ。牧園驛からバスで林田温泉に行つて泊る。韓國岳から、白鳥温泉を通つて加久藤に抜けまうと云ふプラン。處が翌日は雲が低くて何も見えない。でも、山越えがしたく、大浪池まで登り硫黄小屋に出たが、白鳥温泉路も見つからず、自動車道や木馬道をたどつて加久藤驛に出た。林田から歩き通して七時間餘。矢張り白鳥温泉を通つた方が近くて路もよきそ

うだ。この日は、人吉まで引返し翠嵐樓と云ふ珠磨川べりの氣持ちのよい温泉につかつた。

お日願は混雑をさけて熊本で日向ぼつこ。二十一日の夜、阿蘇觀光ホテルまで出向いて二十二日は午前中に汽車で竹田へ、バスで久住町の先の千人塚まで乗る。この日、暴風雨だつたが、法華院の番頭さんと偶然一處になつたので氣を強くして行く。千人塚から法華院迄三時間半(鍋割坂迄の久住高原一里半一時間、鍋割坂から法華院迄一里二時間)法華院温泉は質實で良い宿だ。鹿澤に似てゐる。

翌日は晴れた。北千里嶺を登つて、九重の最高峯(一、八八七・九米)に登る。(地圖の久住山(一、八八七・九米)は九重山が正しく、九重山(一、七六四米)は星生山が正しいと。神河内が上高地と誤られたのと同様らしい)

下りは諏峨越から硫黄事務所に下る。豊後中村に出て由布院に泊りたいため。硫黄事務所で筑紫山岳會の加藤數功氏にお目にかゝる。初対面なのに、お晝の御馳走にまでなり、話盡きず、飯田高原を途中まで送つて下さる。氏の人柄も美しかったが、それと取りまは飯田高原の眞實な枯野の美しさはこの旅行中一番印象の強いもの

であつた。この日は法華院を八時に出て、中村まで歩いて午後四時。飯田高原では加藤氏に教へた氣持の良い起伏のある小路を歩いた。

その夜は由布の湯の坪に泊り、翌日、別府から四國の松山に渡り、大洲を見て、今治、尾道、神戸と伊勢の津で本業の用事を済して三十一日の朝、東京にもどつた。

旅中の腰折一首

筑紫の山こえて海越え今日もまた伊豫の河原に石拾ふなり

九州の山は、大きい裾野(高原)の中心の根據地から半日ぐらいで登つて來られる幾つもの峯を持つてゐますから、割合に樂です。その峯々には變化があつて、高原は大きく、根據地は温泉。一と山越えては湯につかり、また登る。本當に山好きの天國でした。

戦線便り

黒 倚 迪 男

拜啓愈々春花酣なる頃と相成りました、會員諸賢には其後も益々御壯健の御事と存じます、祖國未曾有の此の時局下に、堅く強き結束を以て本會の發展の爲に益々御努力なさいます事に衷心より感謝致す次第です。

扱て小生入會早々軍隊生活に入

り本會の爲微力すらも協力致せず
爾必御無音に打過ぎましたる事を
重ねて御詫び申上げます。御地は
既に櫻花咲き競ふとか承つて居り
ますが當地は漸く長き冬より解放
され、今正に梅花が綻びんとして
居ります。斯うした寒村に於て重
大任務を遂行致して居りまして時
折り陽は落ち夕闇迫る頃、松葉潮
風に驕るを聴くにつけ、想ふは古
里であり、竹馬の友であり、將又
過去の生活でもあります。斯うし
た想ひは等しく第一線將兵の心境
ではないでせうか。當地に参りま
した當時は幾らかスキーを樂しむ
事が出来ました。又附近には小高
い角田山を控へ、谷川山溪を想は
せる様な苔蒸す岩壁等あり、これ
から夏に掛けて絶好の鍛鍊場とし
て暇を見ては出掛け様かと存じて
居ります。今兵舎の東窓を覗けば、
志賀高原から飛驒の連山が未だ眞
白な衣も何時着換へる當もなさそ
うに、唯我々の慾望を喰ひ立て、
居ります。

では會員の皆々様も御自愛
の上御奮闘下さらん事を切望致し
ます。先は不敢取近況御通知まで
勿々。(一八・三)

紀伊木ノ本より

茨木猪之吉

去る三十一日夜行下阪、中井氏
に遇ひ要件をすまし西岡氏と會し
郡山に一泊、岡山倉敷大原美術館
を見る。再び大阪へ戻り和歌山よ
り道成寺、那智瀧、新宮市熊野川
を漕八丁へ上る。木ノ本よりバス
テタにて奥熊野路街道を大和に入
り奈良、京都へ出て十四日頃歸京
の豫定です。(四月七日)

★

前號(第一二二號)正誤表

正誤

第三頁三段七行	沼	沿
〃 二二行	泊	渡
〃 二九行	乾	幹
四段 四行	爲に	爲た
〃 一五行	ないで	ないので
五段 三行	尾	屋
〃 一八行	小蛇尾	小蛇
第四頁四段二行	ないで	なないで
五段 三行	松次郎	松次
第五頁一段八行	では	であるは
四段 一三行	登山家	登山
五段 三行	無沙汰	沙汰
〃 一四行	住	佳



第三回有志懇談會

豫定よりも一ヶ月おくれたが、
辨慶橋の袂から清水谷公園迄八重
櫻が咲き誇つて、中に一本右近の
混るのも珍しく、石南と共に櫻を
好まれた故大平先生を偲ぶ集會に
は頃合の日であつた。
四月二十五日。一時前後からぼ
つ／＼集り、座談約一時間、それ
から座つたまゝで、高頭さんから
「大平先生と私のお話を聞く。苗
場山上壽像建設についての話、明
治十一年十四歳の時米山に登つた
のが故人の初登山であつた事、最
後の登山は恐らく昭和十何年かの
蔵王山であつたばらうとの話、其
他謹厳なりし名譽會員大平氏の數
々の思ひ出が、師恩を想ふ事篤き
高頭氏の口から語られた。
御話がすんでから色々質問が出
たり感想が洩らされたり、誠に意

義のある先蹤者思慕の午後であつ
た。おだやかな日射しの皆香園の
同じ室であつた。

豫定では最近フイリツピンから
歸られた鹿野忠雄氏の御話もある
わけであつたが、都合悪く出席さ
れなかつたのは一に司會者の手落
ちでもあつた。午後四時散會。

第四回は六月下旬とし、世話人
はもう一度だけ同じ三人で引受け
る事とした。

出席者 木村鐵吉、塚本繁松、
茨木猪之吉、柴山登茂次、川喜田
壯太郎、織内信彦、飯田輝英、田
邊主計、大熊保夫、高頭仁兵衛、
飯塚篤之助、吉田竹志、野口末延
沼井鐵太郎、岩永信雄、神谷恭(以
上三人世話人)計十六名。(沼井)

會員 小山源治氏

會員小山源治氏(明治四十一年
七月入會會員番號一六〇番)は一
月九日感冒性急性肺炎にて京都の
自宅にて逝去された。本會は又も
古い會員を失つた事を痛惜し此處
に謹んで哀悼の意を表したい。氏
の山友は石崎光瑤氏等であつた。
法名 好文院傳譽雪嶺曉杜居士

名譽會員 大平 晟氏

名譽會員大平晟氏(明治三十九

年三月入會會員番號三一番)は何
人も知るやうに我が國登山界の草
分けであり、高頭名譽會員の恩師
といふ程の古い登山家であつた。
足跡全土に遍く、老々愈々健脚を
各地に印して居られたが、數年來
中風にかゝられ初めて身體の自由
を失はれたので故郷越後に病を養
つて居られたが、遂に立たず一月
十九日七十九歳の高齡を以て逝去
された。氏の我が國登山界に盡さ
れた功績の偉大さを想起し今更年
ら感謝の意を新たにすものであ
る。人生限りあるものとはいひ乍
ら此處に又巨擘を失ふ。痛惜に堪
へず此處に謹んで哀悼の意を捧げ
たい。

會務報告

三月常務役員會

三月七日午後二時於事務所開催
出席者 木暮、小島、高頭、槇、
冠、木村、沼井、織内、田邊、塚
本

委任 島山外十一名
議長 木暮理庫
議題

一、山岳年鑑ノ件
編纂スルコト、シ項目等ハ次回ニ
檢討スルコト、ス
一、新年度事業方針ノ件

特ニ新タニ事業項目ヲ設ケズ、本年度ノモノヲ繼續進行スルコト、ス

一、役員候補者ノ件

評議員ノ缺員補充ハ來月ノ役員會ニ評議員會ヲ開催シ推薦ノ事

一、次回役員會日

未定 以上

四月常務役員會報告

四月二十三日午後六時於事務所開催

出席者

木暮、横、高頭、島山、沼井、角田、中司、木村

茨木、早川、織内、田邊

塚本

委任 小島、田部、中原、今西、栗飯原、榎谷、交野、額田

議長 木暮理事

議題

一、決算及豫算ノ件

右ニ關シ島山理事ヨリ報告並ニ説明アリ、豫算一部修正ノ上可決。

總會ニカケル事トス

一、通常總會及講演會ノ件

五月十四日開催、總會後ノ講演ハ

慶應大學山岳部

雪洞ニツイテ

右依頼スルコト、ナリ承諾ヲ得タリ

一、日本山岳會賞ノ件

十七年度該當者ナシト決定

一、國土愛護聯盟加盟ノ件

加盟スル事ニ決定

加

一、山岳年鑑内容ノ件

塚本案ヲ一應檢討、編輯企畫ヲ角田、塚本兩氏ニ委嘱

一、入會申込者銓衡ノ件

六名承認

一、次回役員會日 未定

以上

關西支部三月役員會

三月四日午後六時關西支部ルム。出席者 富田、西岡、小川、木藤、栗飯原

一、三月末ニ新舊會員懇談會ヲ開催スルコト

一、四月ニ關西支部會員總會ヲ開催スルコト

一、新年度支部事業ニツキ協議

一、山岳講座出版後ノ一般的報告

告

關西支部會員懇談會

昭和十八年三月二十六日 午後六時半、關西支部ルム

關西在住會員諸氏の集合を催し

新舊會員から腹藏なき意見を聴き

會の事業に採り入れ或ひは岳界最近の動きに鋭い批判を加へる處存であつた。月末繁忙の時であつたが左記會員諸氏出席、特に用意された京の銘菓に番茶のサービスの下に九時半迄懇談する。

出席者 林利春、佐藤治郎、中村勳、三和山岳會、吉岡武治郎、久

保田春雄、鈴木清藏、友田彦士、富田健一、栗飯原健三

會員消息

風見武秀氏 ニューギニアに政府調査隊員として派遣、現地に到着活躍中。

關根吉郎氏 病後静養中であつたが今度勤務先（興國化學工業尼崎工場）に歸任した。

田邊主計氏 三井銀行、第一銀行合併の爲帝國銀行調査部調査課詰となり本店（舊第一銀行）に移る

小野 幸氏 東京市設案内所閉鎖の爲市役所體力課に轉動。

戸澤英一氏 日本興業銀行廣島支店長より本店中小工業資金部長に轉任。

兼松 學氏 内閣總力戰研究所より大東亞省調査官に轉任、大陸の鐵道關係擔當。

鹿野忠雄氏（理博）フィリッピン調査旅行より最近歸國。

日本山岳會賞に就て

昭和十七年度日本山岳會賞授賞について數回役員會にて審議致しましたが、當年度は該當者なしと決定致しました。時局柄とはいへ可及的早く本賞の實現するやう努力したいものであります。

事務所便り

會報の發行が變てこな事になつてから一年近くにもなりました。會員諸氏もそれにこりられたものか、とんと原稿の寄稿がなくて編輯者も大窮りです。しかしどうやら本號あたりから正常に戻る事になるだらうとの自信がつかしました。印刷では今迄何回もだまされまして。別にだます積りでなかつたのでせうが時局がさうさせたのでせう。しかし結局會員諸氏に御迷惑をかけた事になりまして責任者である私の罪大なりと言はねばなりません。深く御詫び致します。前々號あたりから急に見ずばらしい會報になりました、餘りのひどさに恐縮し、以前の姿に戻したく努めました結果、又昔なつかしい形でお目にかけられるのを喜びたいと思ひます。

會報原稿募集

△締切毎月二十日

△用紙十五字詰のこと

△長き 隨意なれ共餘り長いものは會報には不向 但し分載出来るものなら差支へなし

△右御諒承の上續々御寄稿乞ふ

編輯後記

三月號もおくれた爲、三、四月合號になりました。原稿も不足で沼井氏の、原稿のない時に使ふやうにといつて頂戴してあつたものと私がいそいで書いたものや、塚本氏に急にお願ひしたものと、とにかく十二頁にした次第です。から會員通信以外全く原稿がなかつたわけです。

會員諸氏よりお送りの通信は會報に缺くことの出来ないものです。が「論説」や「研究」も特に求めております。近頃「研究」が殆ど見られません。又山の本に關する書評や當會報に對する御意見等伺ひたいと存じます。

前號は誤植が多く、誠に恐縮です。御注意を受けた分を取敢へず正誤表にして本號に掲げました。

昭和十八年五月十三日印刷
昭和十八年五月十五日發行
日本山岳會内
編輯者 田邊 主計
發行者 塚本 繁松
發行所 法人 日本山岳會
東京市芝區琴平町(不二屋ビル)
電話(芝)一六四九
振替東京四八二九九
東京市神田區佐久間町三ノ一七
會員番號 二二〇三三
印刷所 株式會社 文唱堂印刷所
電話 下谷六七八五
會員番號 東京三三一七
東京市神田區淡路町
配給元 日本出版配給株式會社

待望の名家山岳隨筆集成

本書は本邦學界、岳界、美術界の師表たる可き權威者百名家の協力に由るこの國の最高指針たる可く編纂された山、雪、氷、スキー、温泉、地學、山の民俗、風土、詩歌、及び繪と文を一名約四頁宛執筆せるものにして、當に劃期的壯觀として本邦最高の岳書たるの位置を占むるものである。

序文・柳田國男 題簽・木暮理太郎 表裝・正宗得三郎
油彩畫・岡田三郎助 扉畫・中村清太郎 編纂・川崎隆章

B6判 430頁上製 頒價 3.80 送料 .20

買切に付直接本社又は書店へ御注文下さい。初版 3000部を以て絶版と致しますから御入手洩れのなきようお願い致します。内容見本送呈

山と溪谷社編 足立源一郎裝

登山講座

第五卷

木暮理太郎氏積年の努力の結晶たる「東京から見える山々」の力作を初め山の民俗、鳥獸、山小屋の特輯版。殘部僅少となる。第六卷は六月出來す。

全六卷 13.20 送共各卷 2.20 送料 .15

B5判 220頁 口繪 12頁
(附録月報8頁)

日本山岳寫眞書 塚本閻治著

奥日光

清麗を極める寫眞と文に由る新案内書。日光火山群の全貌茲に躍如たり。塚本氏筆原色版口繪「夏の光徳沼」並に精密登山地圖挿入。

B6判 150頁 2.50 送料 .12

既刊=奥 秩 父 白 馬 岳
雪の上信國境
各1.80 送料 .12

近刊=槍ヶ岳 2.50 送料 .12

近刊=山と溪谷社編 全國山の湯旅 目下組版進行中

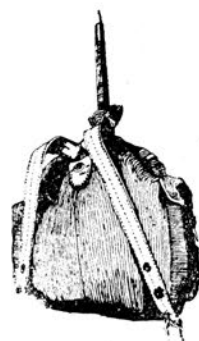
東京市芝區
東田村 6-4

山と溪谷社

電話(芝) 543番
振替東京 60249番

キスリング型(E式)

ルックザック



御手元にある布地御持參になれば
御調製申し上げます

山とスキー具専門

東都最古の専門店

片桐テント登山具店

東京市神田區神保町三ノ一(専修大學電停前)

電話 九段(3)三二一〇番
振替口座東京九一八四番

店主 片桐盛之助